

「基本動作・礼式の基準」

(改訂版)



公益財団法人

ボーイスカウト日本連盟

SCOUT ASSOCIATION OF JAPAN

活用にあたって

この資料は、従来主に訓練機関の標準としていたものを、平成26年（2014年）に日常のスカウト活動における礼式と動作の「基準」としてとりまとめ、提供していました。その後平成30年（2018年）にユニフォームの改正があり、このたび、ユニフォームの改定に伴うイラストの更新、ならびにより分かりやすくするための一部説明文の修正を行い、日本連盟正副コミッショナーの監修により、改訂版として提供することとなりました。

「基本動作」と「集散法」は、各部門共通のものとは異なる内容とを区分しましたが、スカウト活動特有のものについては、リーダーハンドブックを基に内容を集約し、学校教育などで使われているものについては、関係資料を参考に整理しました。

「旗の取り扱い方」については、国旗、隊旗、班(組)旗に分けて示しましたが、これらは、旗の大きさ、ポールの高さ、天候、用具の有無等によって柔軟に取り扱う必要がありますので、最も多く用いられ、標準と思われる内容にまとめました。従って、これらが画一的な方法であるということではなく、あくまでも「基準となるべき内容」であることに留意されるようお願いいたします。

ビーバースカウト隊、カブスカウト隊のスカウトには集団のやくそくや決まりを守って行動すること、またボーイスカウト隊、ベンチャースカウト隊のスカウトには機敏かつ的確に行動することが、活動の安全やスマートネス向上につながるようご指導ください。

2020年8月



公益財団法人

ボーイスカウト日本連盟



目 次

I. 主な基本動作の要領と指導のための留意点

1. 姿勢	
(1) 気をつけ、(2) 休め	1
(3) すわれ	2
2. 礼	
(1) ビーバースカウトの敬礼、(2) カブスカウトの敬礼	3
(3) スカウトの敬礼(ボーイスカウト以上)、(4) 立礼(共通)	4
3. 方向転換	
(1) 右(左)向け右(左)(共通)、(2) まわれ右	5
4. 行進法	
(1) 前へ進め(共通)、(2) 止まれ(共通)	6
5. 握手	
(1) ビーバースカウトの握手、(2) カブスカウトの握手、(3) ボーイスカウト以上の握手	7
6. スカウトサイン	
(1) ビーバースカウト、(2) カブスカウト、(3) スカウトサイン	8
7. スカウトエール(祝声)	
(1) ビーバースカウト、(2) カブスカウト	9
(3) ボーイスカウト以上(いやさか)	10

II. 集散法

1. 集合	11
(1) 共通、(2) U字形	11
(3) 円形、(4) 縦隊	12
(5) 横隊、(6) 開列横隊	13
(7) ビーバーコール	14
(8) カブコール	15
(9) 仲良しの輪	16
2. 解散	17

III. 旗の取り扱い方

1. 国旗の掲揚法	
■ 野外での掲揚法	
(1)-1 国旗をひろげて掲揚する方法	18
(1)-2 国旗を巻いたままあげて、上で開く方法	20
■ 室内での掲揚法	
(2)-1 三脚を使用する方法	21
2. 国旗の降納法	
(1) 隊活動、その他セレモニーの場合	22
(2) キャンプなどの場合	23
(3) 国旗のたたみ方	24
3. 持ち方	
(1) 国旗の持ち方	25
(2) 捧持法	25
(3) 隊旗の持ち方	26
(4) 班(組)旗の持ち方	27

I. 主な基本動作の要領と指導のための留意点

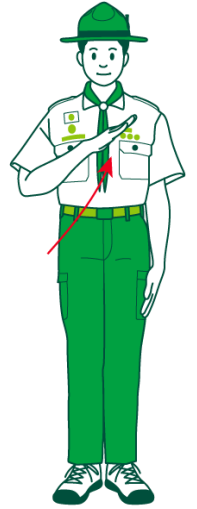
1. 姿勢

(1) 「気をつけ」の姿勢

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「気をつけ」 号笛：———（長音）

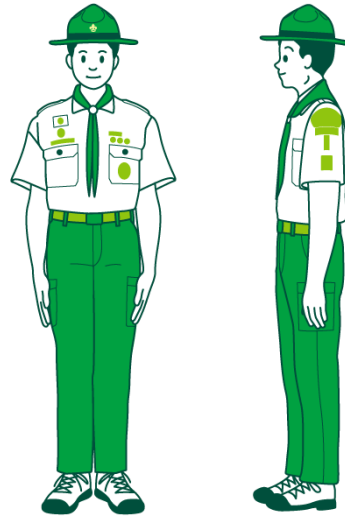
- ① 右腕、ひじ、手のひらをやや外側に出す。
- ② その位置から手のひらを左方に向け、ひじを曲げて人差し指の先を胸の第2ボタン前約15センチに力強く持ってくる。



(B) 指揮者

指揮者は、「気をつけ」の姿勢をとって、合図、号令を発する。
これを基本の動作とする。

※指揮者は注意を喚起する必要がある場合のみ声を発することもある。

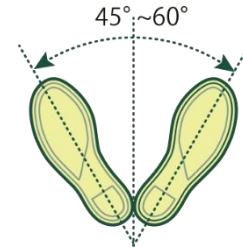


(C) 動作の方法

- ① 両かかとをつけて一線上にそろえ、つま先は自然に開く。
- ② 両ひざ、背すじを伸ばして直立姿勢をとる。
- ③ 両腕は、体側にそってひじを伸ばしておく。
- ④ 手のひらは、指をそろえて軽くのばし、中指をおおむねズボンの縫い目にあてる。
- ⑤ あごをひき、頭と首をまっすぐに保ち、口をとじ、目は正面をまっすぐに見る。

(D) 留意点

- ・ 胸を張り、両肩は力を入れずに均等におろす。
- ・ 体重は、両足に均等にかける。
- ・ つま先は等分に開き、約45度から60度になるようにする。



(E) 備考

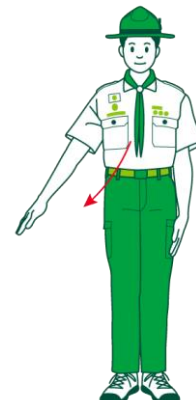
本来は手の合図で行うものであり、号令や号笛は大人数の場合に行うこと。

(2) 「休め」の姿勢

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「休め」
号笛：・———・（短音、長音、短音）

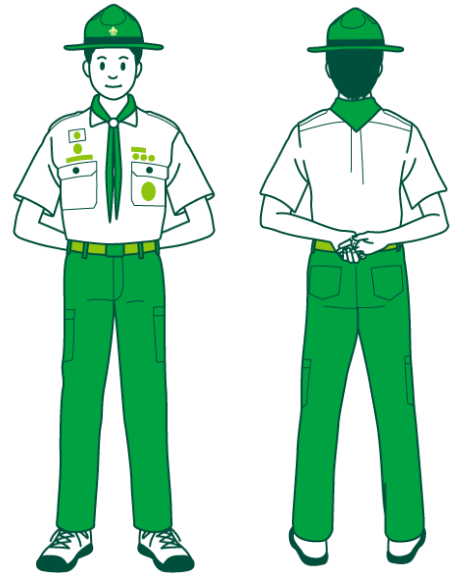
- ① 「気をつけ」②の位置より①の位置におろす。
- ② 手のひらは開いたままでにぎらない。



(B) 指揮者

- ① 姿勢の位置は上に同じ（以下同じ）。
- ② 全員が「休め」をとり終わったことを確かめ自らも「休め」の姿勢をとる。

※ 指揮者は注意を喚起する必要がある場合のみ声を発することもある。



(C) 動作の方法

- ① 左足を肩幅に開き、両ひざを軽くのぼし、体重を両足に均等にかける。
- ② 同時に手は後ろでベルトに添えて組む。
- ③ 手のひらは後ろにむけて開き、左手の親指と四指で右手を軽く握る。

(D) 留意点

- ・ 私語をしたり、動いたりしてはいけない。
- ・ 上体は基本の姿勢のままである。

(E) 備考

「楽に休め」

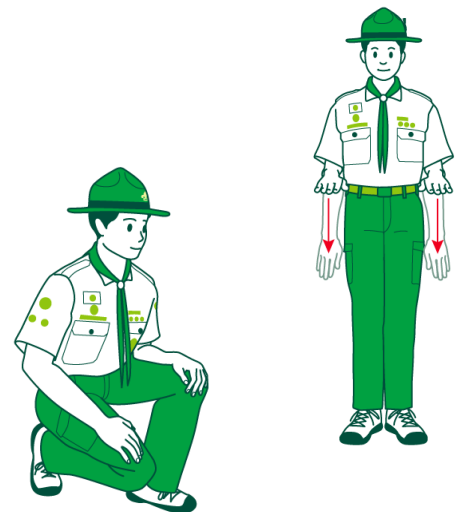
- ・ 休めが長時間におよぶ場合にはこの姿勢をとることもある。
- ・ 肩の力をぬき、手のひらは軽く握ったまま、下の方へさげ、基準になる右足は常に不動の位置に置く。

(3) 「すわれ」の姿勢

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「すわれ」

- ① 手のひらはひらいたままで両手を胸の前にもってくる。
- ② その位置よりベルトの位置までさげて止める。



(B) 動作の方法

- ① 右（左）足を一足分、後ろに引いてしゃがみ、かかとの上に尻を乗せた姿勢をとる。

(C) 備考

「腰をおろして休め」

「すわれ」が長時間におよぶ場合においてこの姿勢をとることもある。
腰をおろし、両ひざをそろえて軽く曲げ、手はひざのやや下方で、ひざがしらをかかえこむように組む。



2. 礼

(1) ビーバースカウトの敬礼

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「敬礼！」「なおれ」

(B) 動作の方法

- ① 右手の人差し指と中指をつけたまま伸ばし、上腕部を曲げ、人差し指を右目の横につける。
- ② 二本の指の腹を少し見えるようにする。



(2) カブスカウトの敬礼

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「敬礼！」「なおれ」

(B) 動作の方法

- ① 右手の人差し指と中指を広げ人差し指の先が帽子のひさしにつくようにする。
- ② 目は相手の目を見る。



(3) スカウトの敬礼（ボーイスカウト以上）

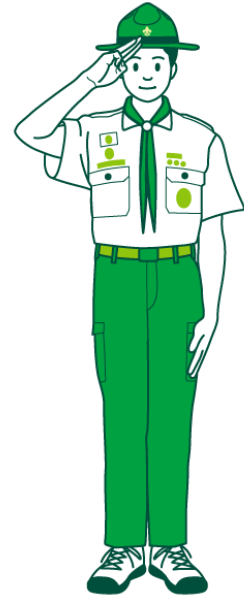
(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「敬礼！」 「なおれ」

(B) 動作の方法

- ① 姿勢を正しく受礼者（受礼点）に注目し、スカウトサインと同じく、右手で三指をつくり、人さし指と中指の間を右目の右上と帽子のひさしとの交点付近になるように、手のひらをやや外側にむけて、快活にあげる。
- ② つばのない帽子または、無帽のときは右目の上の額に人さし指の先が触れるようにする。
- ③ ひじは、肩の方向にほぼその高さを等しくする。
- ④ 手の上げおろしは、最短距離をとるようにする。

※受礼者の敬礼が終わった時に「なおれ」の動作をして元の姿勢となる。



(4) 立礼（共通）

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「礼」 「なおれ」
「〇〇に礼」と発する。

(B) 指揮者

- ① 気をつけの姿勢で、受礼者に対してから、上体を約30度前に傾ける。
- ② 帽子は右手に持ち、内側をももに向けて垂直にさげ、左手はももにつけてたれる。
- ③ 静かに上体をおこす。

(C) 動作の方法

- ① 気をつけの姿勢で、受礼者の正面に向かって、上体を約30度前に傾ける。
- ② 副帽（作業帽など）を持っているときには、右手に前ひさしをつまみ、内側をももに向け垂直にさげ、左手はももにつけてたれる。

(D) 留意点

- ・ 室内で脱帽時に多く用いる。
- ・ 受礼者の正面に向かって相手の目を見る。
- ・ 上体を傾けるとき、背が曲がらないようにする。
このとき視線は自然に床におちるようにする。



3. 方向転換

(1) 右(左)向け右(左) (共通)

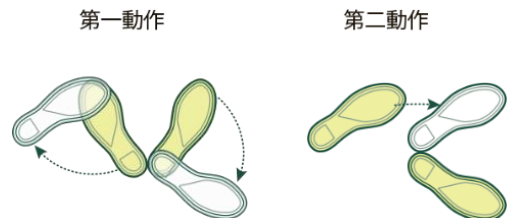
(A) 合図(号令・号笛・手の合図)

号令：「右(左)向け一右(左)」

(注) 明朝文字は予令、ゴシック文字は動令を表す

(B) 動作の方法

- ① 左(右)かかとと、右(左)つま先をわずかにあげ、左(右)の足つま先に力を加え、右(左)足のかかとで右(左)へ90度回る。
- ② 左(右)足を、右(左)へ引きつける。



(C) 留意点

- ・ 右(左)へ方向転換をする場合、第1動作では右(左)足の踵を軸にし、頭、腰及び右(左)足の踵が一直線になるようにして、体を90度右(左)へ回すようにする。
- ・ 両腕の指先を体側に軽くつけたまま動作し、方向を変える。
- ・ ビーバースカウト、カブスカウトは、その場で足を踏みかえながら右(左)へ向きを変えることができればよい。(無理な指導はしないこと)

(2) まわれ右

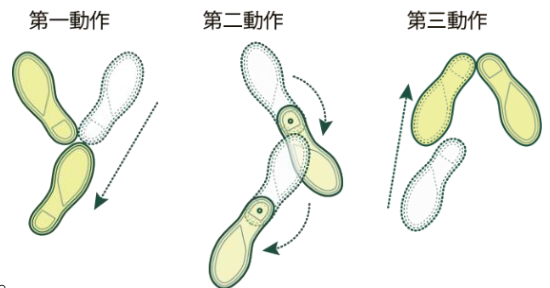
(A) 合図(号令・号笛・手の合図)

号令：「まわれ一右」

(注) 明朝文字は予令、ゴシック文字は動令を表す

(B) 動作の方法

- ① 右足を約1足の長さを斜め後ろ(右足の向いている方向)に引く。
- ② 両足のかかを軸にして、180度右に回り後ろに向きをかえる。
- ③ 右かかとを左かかへと引きつける。



(C) 留意点

- ・ 右足を引く場合、体重が前に残らないようにする。
- ・ 右足は、わずかに左かかとから離れるように引く。
- ・ 回るときは、両腕は体側に軽くつけ、手の指をそろえる。
- ・ 姿勢をくずさないように、すばやく、正確に回る。
- ・ ビーバースカウト、カブスカウトは、回る方向を具体的に(手や物で)指示し、その場で足を踏み替えながら右回りで後ろを向かせてもよい。



4. 行進法

(1) 前へ進め (共通)

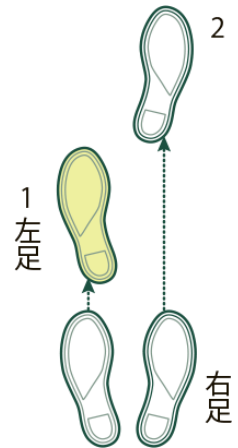
(A) 合図 (号令・号笛・手の合図)

号令：「前へー進め」

(注) 明朝文字は予令、ゴシック文字は動令を表す

(B) 動作の方法

- ① 「前へ」の予令で気をつけの姿勢になる。
- ② 「進め」の動令で、左足から踏み出して歩き始める。
- ③ 上体は自然に起こして胸をはり、腰と膝を伸ばし、足はかかとから着くようにし、腕はひじを伸ばして前後に自然に振り、頭をおこしあごを引いて前方を見るようにする。



(C) 留意点

- ・ つま先をまっすぐ進行方向に向けて歩く。
- ・ 腕は、肩の高さよりやや低めになるぐらいに自然に振って、足をそろえて歩くようにすることが望ましい。
- ・ 前の者の腕の振りを見て、歩調が違っているときにはツーステップの要領で足を踏み換えてそろえる。

(D) 備考

- ・ ビーバースカウト隊では、拍子に合わせ、縦の列を乱さないで歩けるようにする。
- ・ カブスカウト隊では、歩調をそろえて正しい姿勢で歩けるようにする。
- ・ ボーイスカウト隊およびベンチャースカウト隊では、距離・間隔に注意し、縦・横の列や歩調をそろえて正しい姿勢で歩けるようにする。

(2) 止まれ (共通)

(A) 合図 (号令・号笛・手の合図)

号令：「全体ー止まれ」

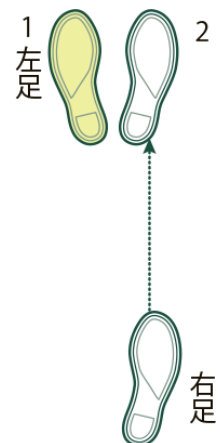
(注) 明朝文字は予令、ゴシック文字は動令を表す

(B) 動作の方法

「全体ー止まれ」の合図で前に一步踏み出し、次の足を引きつけてかかとをそろえ、つま先を開いて止まる。

(C) 留意点

- ・ 「止まれ」の合図は、右足が着地したときに掛け、左・右の2動作で止まるようにする。



5. 握手

(1) ビーバースカウトの握手

(A) 動作の方法

握手は仲間と親しみの気持ちを込めて行う挨拶であるが、この年代では特別なやり方は適さず、その機会も少ないので特に定めない。握手の必要があれば、通常の右手の握手をすることにする。

(2) カブスカウトの握手

(A) 動作の方法

相手と向かい合い、右手を伸ばし、人差し指と中指を相手の右手首の内側につけ、残りの3指で相手の手を握る。



(3) ボーイスカウト以上の握手

(A) 動作の方法

左手の親指と人差し指の間および薬指と小指の間を開け、他の指を揃え、互いに組み合わせる。



6. スカウトサイン

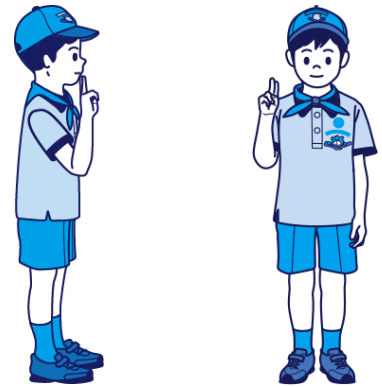
(1) ビーバースカウト

(A) 動作の方法

ビーバースカウトのサインは、敬礼と同じ指の形をし、イラストのように右腕を垂直にたてて行う。

(B) 留意点

- ・ ビーバースカウトのサインは、ビーバースカウトのやくそく、ビーバー隊のきまりを唱えるときに用いる。



(2) カブスカウト

(A) 動作の方法

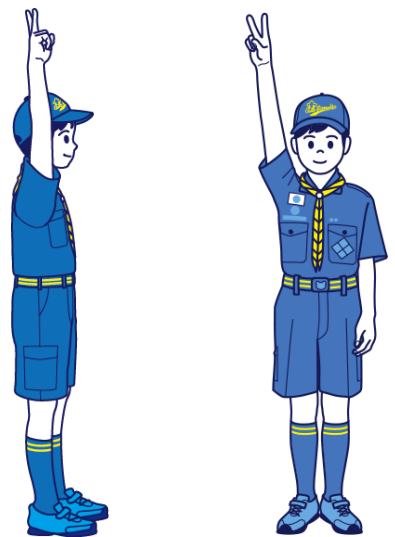
- ① 「気をつけ」の姿勢で、右手を肩の上にまっすぐのばし、人差し指と中指を広げ、他の指はかるく握る。
- ② 目は前方を見る。

(B) 留意点

- ・ カブスカウトのサインは、カブ隊のやくそく、さだめを唱えるときに用いる。

(C) 備考

- ・ 二指をつくった右手をまっすぐに伸ばして、スカウトを静かにさせるとき、注目させたいとき等に用いることもある。



(3) ボーイスカウト以上

(A) 動作の方法

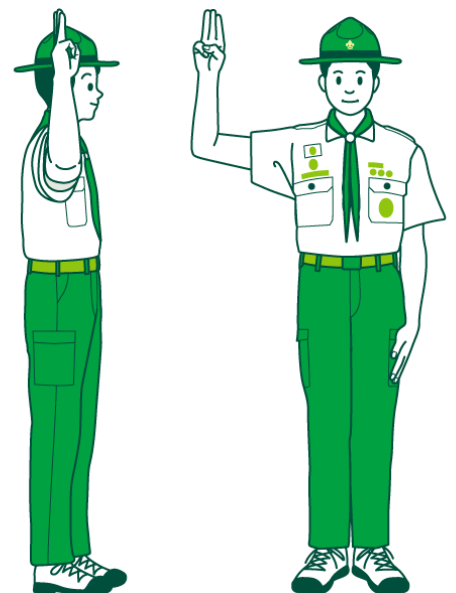
右手で三本指をつくり、腕は横に肩と水平に上げ、ひじを90度に曲げてまっすぐに上にのばす。

(B) 留意点

- ・ スカウトサインは、“ちかい”をたてる時
“ちかい”を唱えるとき
“おきて”を唱えるときなどに行う。

(C) 備考

- ・ 三指をつくった右手をまっすぐに伸ばして、スカウトを静かにさせる時、注目させたいとき等に用いることもある。



7. スカウトエール（祝声）

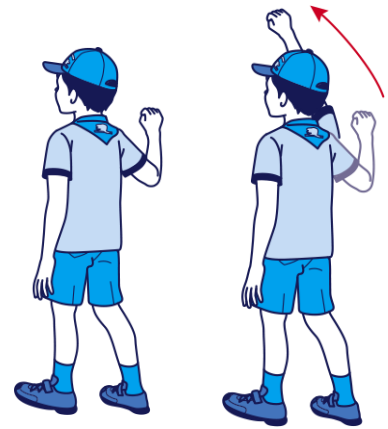
(1) ビーバースカウト

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

「おめでとうビーバー！」

(B) 動作の方法

- ①（送る側）右足を半歩後ろに下げて、右手にこぶしを握り、右ひじを曲げて右肩の後方に引く。なお、帽子はかぶったまま。
- ②（送る側）発声「おめでとう！ ビーバー」の「ビーバー」と同時に、右手のこぶしを前方斜め上に突き出す。（受ける側）気をつけの姿勢で敬礼をする。
- ③（受ける側）①～②の送る側と同様の動作により「ありがとう！ ビーバー」と発声する。（送る側）拍手をする。



(C) 留意点

- ・ 答礼時、祝声を送った側は全員で拍手を送る。

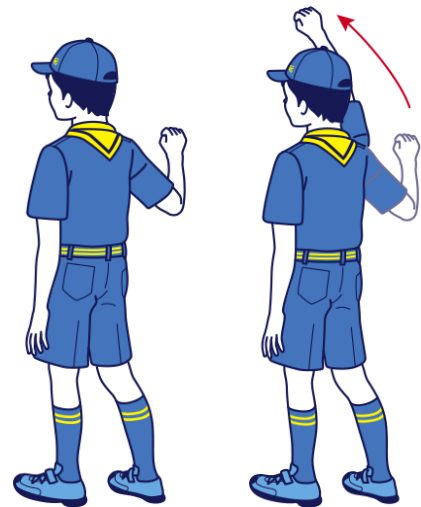
(2) カブスカウト

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

「ウォーウォーウォー！」

(B) 動作の方法

- ① 受礼者に向かって正面を向き、右足を半歩後ろに引く。
- ② 帽子をかぶったまま、右手にこぶしを握り、ひじを曲げ、右肩の後方に引く。
- ③ 発声者のかけ声、例えば「〇組おめでとう」「ウォーウォーウォー」と3回元気良く叫ぶ。このとき「ウォー」に合わせ、握りこぶしを前方斜め上に突き出す。
- ④ 祝声を受ける側は、敬礼して受ける。
- ⑤ 祝声が終わったら、受礼者は答礼をする。動作は祝声と同じ「ありがとう、ウォー」と元気良く1回行う。



(C) 留意点

- ・ この祝声は、相手への激励や感謝の意を示すときに行う。



(3) ボーイスカウト以上（弥栄（いやさか））

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

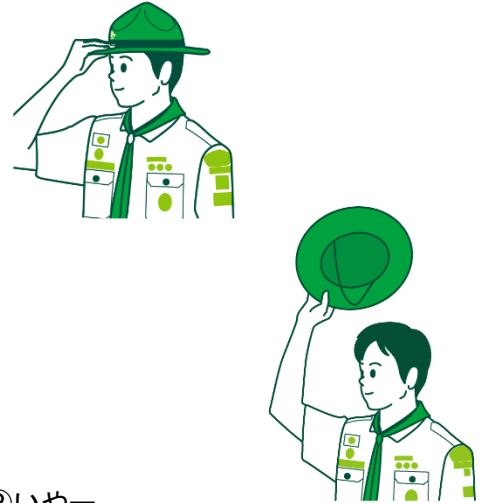
号令：「いやーさか」（3回繰り返す）

(B) 動作の方法

ア. 着帽時の場合

- ① 発声者が発声の位置につき、各員は気をつけの姿勢から、祝声者の発声で帽子正面のつばを右手で持ち、頭上に掲げ、「いやさか」の用意をする。
- ② 発声者の「いやー」で、右足を体の後方にひくと同時に、右手を後方へ引き、「一さか」で右手（帽子）を勢いよく頭上にふり上げる。これを3回くり返す。
- ③ 目は受礼者または正面を見る。
- ④ 最後の「さか」で、右足を左足にそろえて元の姿勢にもどり、帽子をかぶる。
- ⑤ 動作時、左手は体側にそえ、自然にふるまう。

①用意



イ. 脱帽時の場合

- ① 発声者が発声の位置につき、祝声者の発声まで気をつけの姿勢をとる。
- ② 発声者の「いやー」で、右足を体の後方にひくと同時に、右手を後方へ引き、「一さか」で右手を勢いよく頭上にふり上げる。これを3回くり返す。
- ③ 目は受礼者または正面を見る。
- ④ 最後の「さか」で、右足を左足にそろえて元の姿勢にもどる。
- ⑤ 動作時、左手は体側にそえ、自然にふるまう。

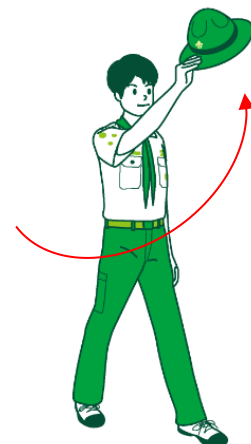
②いやー



(C) 留意点

- ・ 受礼者に正対するのではなく、斜めに対することになる。
- ・ 3回目は最も大きく動作・発声する。
- ・ 帽子をかぶる際には、速やかに両手で整える。
- ・ 受礼者は敬礼をして受ける
- ・ 「いやさか」で答礼する場合は、3回くり返す。

②さか



II. 集散法

(イラストの班数、および人数は一例です)

1. 集合

(1) 共通

(A) 合図(号令・号笛・手の合図)

号令:「集合」 号笛:「——」

(B) 指揮者

指揮者は集合の合図をして、隊形を示す手の合図を行う。

(C) 動作の方法

集合の隊形は、特に指示するもののほかは、通常、手の合図によるものとする。

(D) 留意点

- ・ 指揮者の位置

指揮者は、通常指揮掌握および訓練に最も適切な位置で指揮を行う。

(2) U字形

(A) 合図(号令・号笛・手の合図)

号令:「U字形に集合」

(B) 指揮者

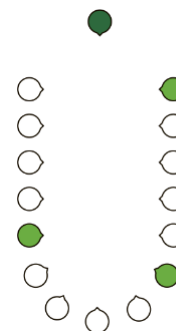
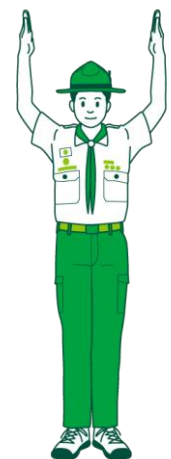
頭上で、両腕をU字になるように腕を伸ばす。
この時、手の指を揃え、まっすぐに伸ばす。

(C) 動作の方法

- ① 指揮者の位置より、やや前方で、各班1列、内側を向いて、U字形をつくる。
- ② 整列のしかたは横隊に準ずる。

(D) 留意点

- ・ 隊形は、指導者側に口を開く形をとる。



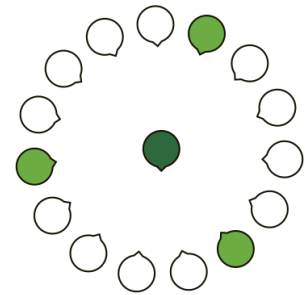
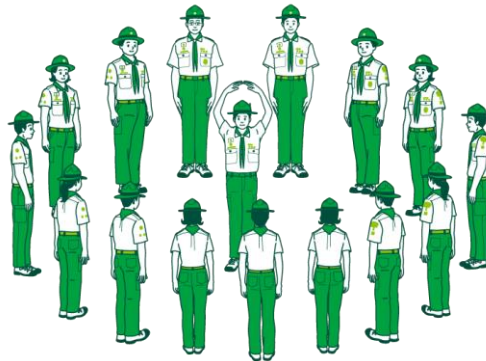
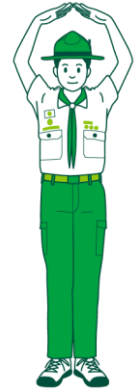
(3) 円形

- (A) 合図（号令・号笛・手の合図）
 号令：「円形に集合」

- (B) 指揮者
 頭上で、両指先を合わせて円を作る。

(C) 動作の方法

- ① 指揮者を中心に、そのまわりを各班1列、内側を向いて正しい円形をつくる。
- ② 整列のしかたは横隊に準ずる。



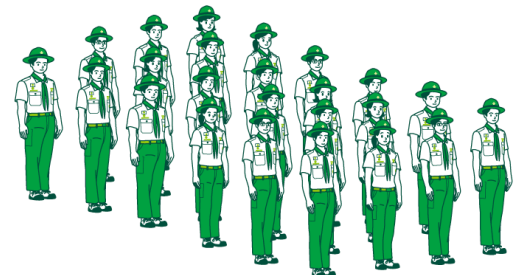
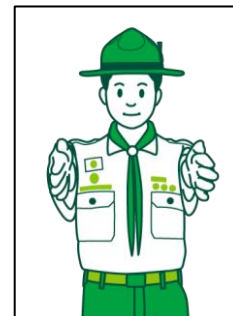
(4) 縦隊

- (A) 合図（号令・号笛・手の合図）
 「縦隊に集合」

- (B) 指揮者
 両手をまっすぐに前に伸ばす。

(C) 動作の方法

- ① 指揮者に向かって前列の基準者（通常班長）は、すばやく指揮者の前3、4歩の距離をとって定位置につく。
- ② その他の班員は、これを基準として、正しく距離をとって縦隊をつくる。
- ③ 隊員は基準列の者を基準として、正しい間隔をたもつ。
- ④ 最前列の隊員は、間隔をとるために、右手をあげて（片手間隔横隊で）右にならうが、この際、後列の者は、前列の者にならった後、右列にあわせて前後の間隔をとる。



(D) 留意点

- ・ 前の者との距離は約1mとする。



(5) 横隊

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

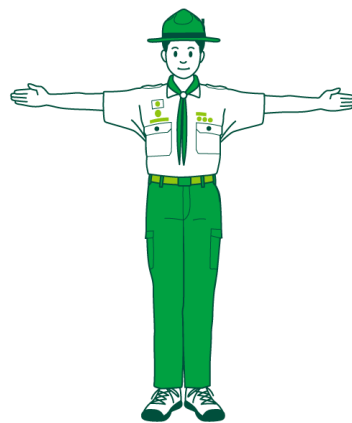
号令：「横隊に集合」

(B) 指揮者

両腕をまっすぐ横に伸ばす

(C) 動作の方法

- ① 班ごとに1列横隊の隊形をとる。
- ② 集合の際は、特に指示のない限り指揮者に向かって最右端者（基準者）を除き、右手を腰にあてて、短間隔をとる。
- ③ 四指をそろえてのばし、手のひらを下にして親指と他の四指の間に腰をはさみ、手首を軽く下げ、右の者にふれるまで間隔をとり、これにならう。（ひじは体と一線になるように張る）。
- ④ 最右端の者を除き、各員は正しい間隔をとり右にならんだならば、直ちに（号令を待つことなく）右の者から逐次腕をおろし、頭を正面にもどす。
- ⑤ この際、最右端の者は前方を直視したままである。
- ⑥ その他は、集まれと同じ。



(D) 留意点

- ・ 通常、横隊に整列するときには短間隔をとる。

(6) 開列横隊

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

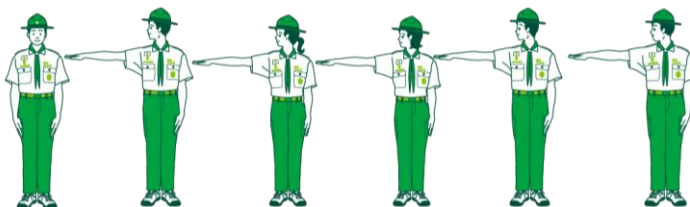
号令：「片手間隔横隊に集合」

(B) 指揮者

両腕をまっすぐ横に伸ばす

(C) 動作の方法

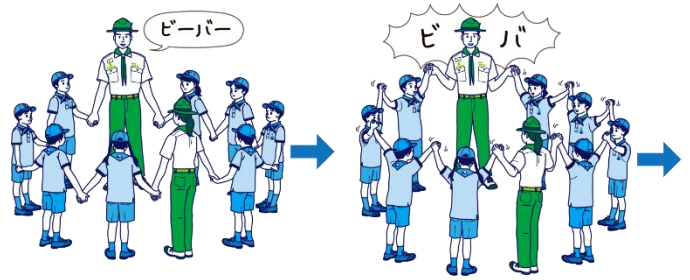
- ① 右腕を肩の高さに水平に上げて、手のひらを下に向け、指をそろえて伸ばす。
- ② 各員は、最右端者を除き、頭を右に回し、自己の指先と右の者の肩とがわずかに触れるようにならう。
- ③ 最右端の者を除き、各員は正しい間隔をとり右にならんだならば、直ちに（号令を待つことなく）右の者から逐次腕をおろし、頭を正面にもどす。この際、最右端の者は前方を直視したままである。



(7) ビーバーコール

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

隊長：「ビーバー集まれ」
 歌「みんなで大きな輪をつくろう」
 （歌から続けて）
 隊長：「ビーバー」
 スカウト：「ビバ・ビバ」
 全員：「ビーバー」



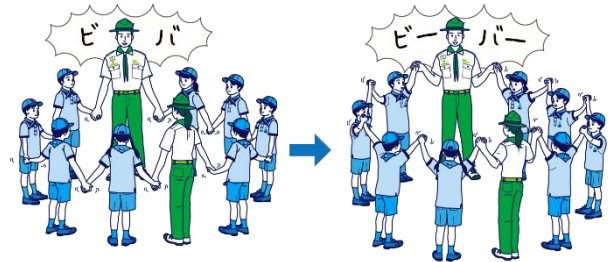
(B) 指揮者

縦隊動作
 手を横に広げるスカウトと手をつなぐ

つないだ手を下へ
 上へ→下へ

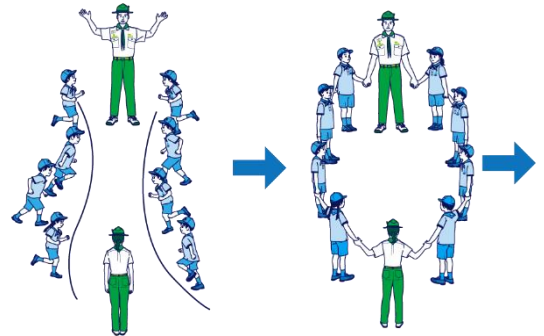
上へ（飛び上がり手を離す）

「こんにちは！」と敬礼



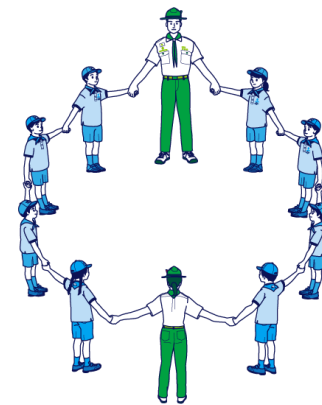
(C) 動作の方法

- ① 「ビーバー集まれ」と元気に呼びかけ、指導者は縦隊に集める。
- ② 隊長・副長は端のスカウトと手をつなぎ「みんなで大きな輪をつくろう」を歌いながら前後に手を振りながら円形に変える。
- ③ 歌が終わったらビーバーコールを行う。手を下ろし全員で敬礼をし「こんにちは！」などと指揮者が声をかける。



(D) 留意点

- ・ 動作①のときに列順位はなく、早いものから2列に並ぶが、川をイメージしているので列は曲がっていてもよい。
- ・ 動作②はダムを表す。（参照書籍：「森の仲間」）
- ・ ビーバーコールは簡単であり、みんなで手をつなぎあって、声をあわせて大きく呼ぶとビーバーと指導者の心をひとつにできるので、集会の開会や閉会のときに仲間のあいさつとして用いると効果的である。
- ・ ビーバースカウトについては「集合」とせず「集まれ」と号令する。
- ・ 閉会のときも、同様のコールを行う。



(8) カブコール

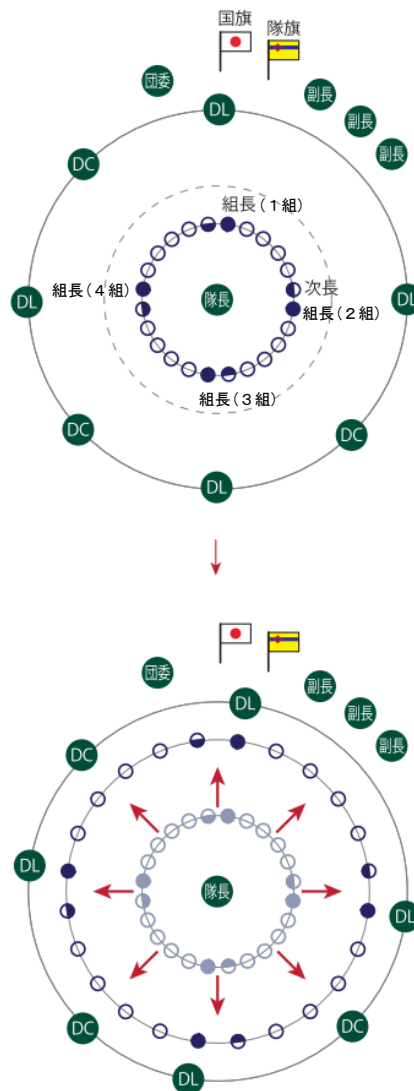
(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「パック！ パック！・パック！」

(B) 動作の方法

- ① 号令は歯ぎれよく、スカウト達に呼びかける。同時に両手を頭上に上げ円をつくる。指先は触れ合わせるか少し重ねるとよい。
- ② スカウト達は、「ウォー」と元気よく呼応し、指揮者のまわりに互いに肩がふれ合う程度の小さい輪になる。指揮者の後ろに1組の組長、組員～次長、2組の組長の順に時計まわりに各組が並ぶ。1組の組長の右とには4組の次長が位置する。
- ③ 指揮者は指先を離し、両腕を横に伸ばしながら水平になるまで降ろしていく。
- ④ スカウト達は指揮者の腕の動きに合わせて後ろに下がりながら輪を広げる。
- ⑤ スカウト達は指揮者を中心にきれいな大きな輪を作ったのを確認してから、水平にのばした両腕を下まで降ろす（この際、両手に2指を作る）。
- ⑥ スカウト達は指揮者の両手が下がるのに合わせてしゃがみ、ひざを開き、その間に両手で2指を作り、その指先を地面につける。
- ⑦ スカウト達がしゃがみ、落ち着いたら指揮者は立ったまま呼びかけるように周りを見渡しながらかぶコールをする。

- ・ りすスカウトは“指揮者”が「りーすー」と歌った後すぐに「りすー」と歌う
- ・ うさぎスカウト歌う「うさぎー」
- ・ しかスカウト歌う「しかー」
- ・ くまスカウト歌う「くまー」
- ・ 「月の輪」より全員で歌う
- ・ “指揮者”に続き今度はスカウト全員で唱和「ウォー・ウォー・ウォー！」の最後のウォーで両手を上に伸ばしながら、全員元気良く飛び上がる。着地してから指揮者に敬礼する



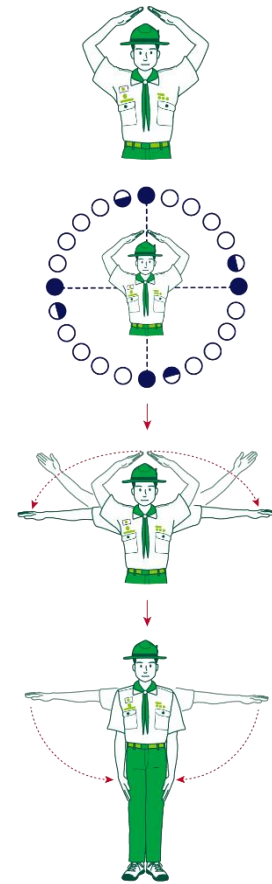
(2) -⑥の図

(C) 留意点

- ・ 指揮者は原則として隊長か副長である。
- ・ 動作①は、パックで1呼吸おいて、パック、パックと続けて呼ぶ。
- ・ 動作②で、指揮者は自分を中心にきれいな小さい輪ができるように注意する。
- ・ 動作③で、手はあまり早く降ろさぬようにし、スカウトの動きを見ながら円が崩れないように留意する。



- ・その後徐々に手のひらをかえしながら水平にし、両手はゆっくり下げる方がよい。
- ・組長のもっている組旗はカブコールに入る前にデンリーダー（またはデンコーチ）があずかり、カブコールが終わったら組長に返す。
- ・スカウトの顔は、指揮者を注目したままこの姿勢をとらせる。
- ・しゃがむのはカブスカウトのみである。
- ・歌い方はいろいろ考えられる。はじめから終わりまで全員で歌ってもよい。
- ・指揮者はカブコール中、上体をまわしながらスカウト達を見わたす。
- ・指揮者も最後の「ウォー」でとび上がる。着地と同時に両手をおろし気をつけの姿勢をとり、それからカブスカウト全員の顔を見ながら敬礼をする



(9) 仲良しの輪

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「デン、デン、デン」

(B) 指揮者

組長が「デン、デン、デン」と声をかける。



(C) 動作の方法

- ① 組員は「ウォー」と叫びながら、仲良しの輪をつくる。
- ② カブスカウトたちは、お互いの手が握りあえる程度に内側に向かいあい小さな輪をつくり、左手の手のひらを下にして前に出し、親指をのばした握りこぶしをつくる。
- ③ 右側のスカウトが左側のスカウトの親指を次々に握り、握りこぶしの輪をつくる。
- ④ 体を右斜めにし、右足を半歩後ろに引き、カブサインのように指先をのばした右手を上には伸ばす。
- ⑤ 全員大きな声でそろって「○組」次に「いつも」といいながら右手を斜め後ろに引き「げ」で右腕を高く上にあげ「ん」でまた右手を後ろに引き「き」で腕をもう一度上に振り上げ左手の輪を解きながら両手を上に振り上げ、とび上がる。



- ⑤ 着地と同時に両手をおろし、気をつけの姿勢をとり、お互いに敬礼をする。

(D) 留意点

- ・ 時にはデンコーチも仲良しの輪に入れてもらうこともよい。(主導者は組長)
- ・ こぶしの輪ができたなら、足を動かさないようにする。
- ・ 組長が「〇組」と呼んで仲良しの輪をリードすると動作がよく揃う。
- ・ 「いつも」「げ」「ん」「き」のリズムは、カブスカウト歌集「いつも元気」の最後の「いつもげんき」と同じテンポで元気よく行う。



2. 解散

(A) 合図(号令・号笛・手の合図)

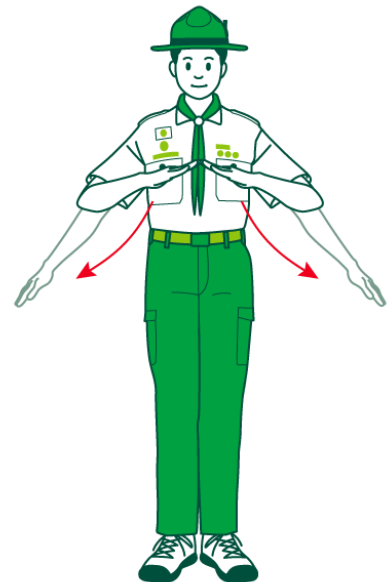
号令：「わかれ」

(B) 指揮者

胸の前で肘を張り、指先が触れる程度に合わせた状態から手を斜め下に振り下ろす。

(C) 動作の方法

- ① 隊員は、指揮者に対し各自敬礼をして、分かれる。
- ② この場合、各個人勝手に分かれるのではなく、班長等の指示を待って統一ある行動をとり、次の作業等に向かって、軽快に行動する。



Ⅲ. 旗の取り扱い方

1. 国旗の掲揚法

■ 野外での掲揚法

(1) - 1 国旗をひろげて掲揚する方法

【掲揚準備】

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「国旗掲揚」

(B) 動作の方法

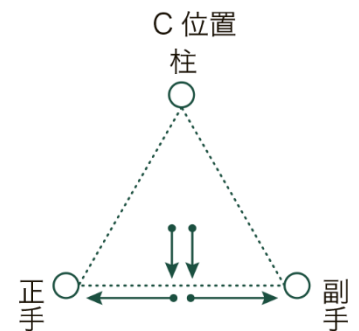
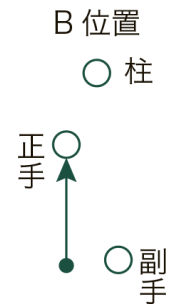
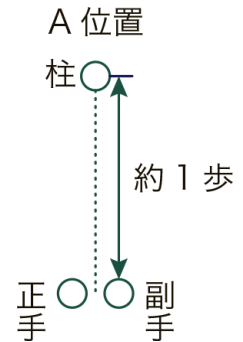
- ① 「国旗掲揚」の指示で掲揚手2人は1歩前を出て、国旗授与者に向かって駆け足で進む。(授与者に向かって左に正手、右側に副手) 正手が国旗を受け取り、掲揚柱の方向に向き、駆け足で進む。

(一例)：時間短縮のため、掲揚柱(以下単に柱という)にロープを2本いっしょにして国旗とともに綱止めにかからせておくこともできる。ただし、雨天時または、セレモニーによっては掲揚時に結ぶこともある。

- ② 柱の前で止まり、柱の方に向く。この時、柱との間隔を約1歩分あける。以下この地点を“**A**”位置と呼ぶ。柱に向かって左側の者を正手、同じく右側の者を副手と呼ぶ。
- ③ 正手のみ柱に1歩進み(以下この位置を“**B**”位置と呼ぶ)綱止めからロープと国旗をはずし“A”位置に戻り国旗を結び付ける。
- ④ 正手はロープのもつれ、よれを直し国旗をつけたロープ(とも綱)を副手に渡す。正手はもう一方のロープ(あげ綱)を持つ。
- ⑤ 正・副手は1歩後ろに下がり、1歩横に開く。真上から見て、柱と正・副手は正三角形の頂点の位置についてことになる。この位置を“**C**”位置と呼ぶ。
- ⑥ 副手は国旗を開き(国旗がたたんだまま揚がらないように注意する)国旗の下端を、ロープとともに左手でつかみ、右手で国旗の下部をかかえるように支える(肩に載せない)。正手はロープを少し引いて、国旗の上端を副手の頭頂近くまで引き上げる。
- ⑦ 正手は左手でロープをつかみ(ゆるまないよう注意する)右手をあげて準備のできた事を知らせる。右手の指は5本ともまっすぐ伸ばし、三指をしたり、握りこぶしにしない。

(C) 留意点

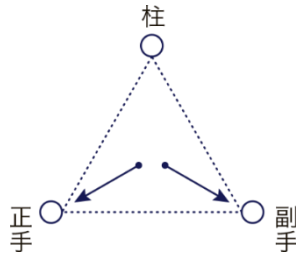
- ・ 掲揚(降納)手は国旗儀礼の主演である。きびきびした動作とスマートネスに心掛ける。
- ・ 大きい移動の時には「駆け足」。方向を変える時には「まわれ右」「右(左)向け右(左)」。
- ・ 正・副手のタイミングが大事(正手が号令をかけてもよい)。
- ・ 副手は掲揚柱に近づかない。



- ・ 正手が国旗をロープに結び付けているときは、副手は正手の動作に気を配り、国旗を抱えながら掲揚ロープを持ち、正手の動作の支援をする。
- ・ 正手の動作が多いが、副手も同様に重要である。正手のみが動作中の時、副手は直立不動でまっすぐ前を向いていること。
- ・ 動作は自信を持って。あわてないように、十分練習しておくこと。特に掲揚の際、他人の準備した国旗をはずすのは、あわてることが多いので、掲揚手みずから準備するほうが望ましい。
- ・ 国旗の大きさやタレヒモの長さによって“C”位置は異なるので、事前に確認すること。

(参考) 上記のものを基本とするが、国旗が特に大きい場合については、副手も“B”位置に進み正手の補助をする場合がある。

(参考) “C”位置については上図を基本として行うが、条件によっては他の方法等についても考えられる。(下図)



【掲揚】

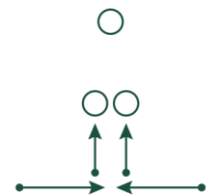
(A) 合図 (号令・号笛・手の合図)

号令：「上げ」

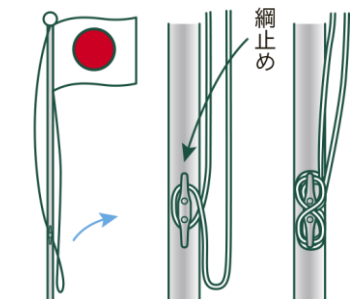
(B) 動作の方法

- ① 正手は、「上げ」の指示で右手・左手で交互にあげ綱を滑らかに引き、国旗が冠頭につくまで上げる。(伴奏音楽がある場合は、これに合わせる)。
- ② 国旗が冠頭まで揚がったら全員敬礼をやめる。(また、担当者が「直れ」の指示をする)「直れ」指示後(指示のない時は一呼吸おいて)正・副手は1歩前を出て“A”位置に戻る。正手はロープがゆるまないよう注意する。
- ③ 正手はあげ綱を綱止めに1回巻いてから、副手からも綱を受け取り、2本合わせて綱止めに8の字に巻き、端末を始末する。
- ④ 正手は“A”位置に戻り、副手に合図を送って2人そろって国旗に向かって敬礼をする。
- ⑤ 両者その場でまわれ右をし、最短距離を駆け足で隊列の自分の位置に戻る。
- ⑥ 国歌「君が代」を歌う場合は、全員国旗に向かったまま待機し、掲揚手が戻ってから歌いだす。「君が代」以外は司会の合図で中央を向いて歌う。

- 大会・ジャンボリー等、ポール・旗の大きさや参加人員の規模によって掲揚法は異なるので、注意する。



“C”位置から“A”位置への戻り方



(1) - 2 国旗を巻いたままあげて、上で開く方法

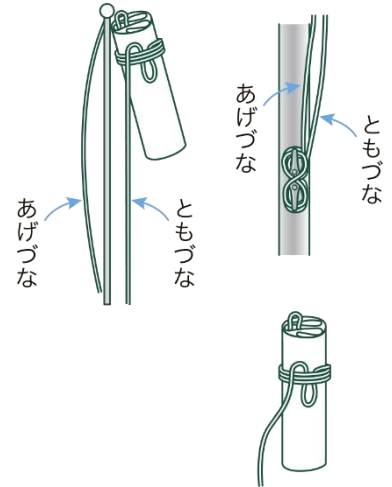
【掲揚準備】

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「国旗掲揚」

(B) 動作の方法

- ① 掲揚手は、巻いた旗をそのまま「あげ綱」にとりつけ、事前に掲揚柱の冠頭いっぱいにあげて「あげ綱」を綱止めに1回巻いた後、2本のロープをそろえ、8の字に巻き、始末しておく。
- ② 掲揚手は号令で国旗掲揚柱の真下に進み、右手を真っすぐ上に伸ばし、ともづな（引き綱）をしっかりとつかむ。



【掲揚】

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「ひらけ」

(B) 動作の方法

- ① 「ひらけ」の号令で、掲揚手はつかんだ「とも綱」をぐっと引いて開く。
- ② 全員、国旗に対して注目し、敬礼する。
- ③ 掲揚手は綱から手をはなして1歩下がり国旗に敬礼をする。
- ④ 隊員は、掲揚手が敬礼を終わる動作にあわせて、敬礼を終わる。



(部門共通)

次の場合「開け式」を使う

- ・悪天候の場合
- ・紐が寄り綱の場合
- ・掲揚ポールが短い場合



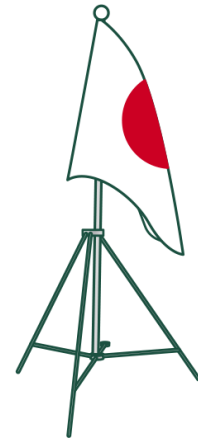
■ 室内での掲揚法

(2) - 1 三脚を使用する方法

(ア) 国旗だけを掲げる方法

(A) 留意点

- ・ 冠頭のついた旗竿に国旗をつけ、これを三脚台にさしこみ、演壇に向かって左側に置く。
(注) 国旗は、旗竿と冠頭がそろって完成される。
- ・ 国旗は通常三脚に直立させる。
- ・ 演壇の中央に置く場合もある。

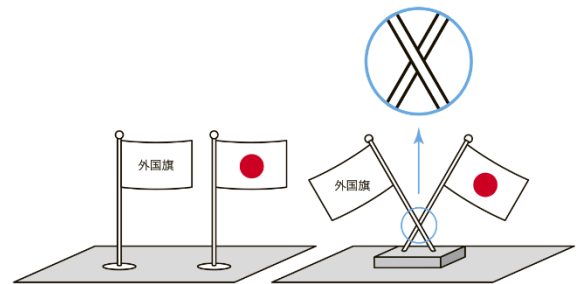


(イ) 国旗以外の旗と併掲方法

(日本国旗と外国旗を併掲する場合)

(A) 留意点

- ・ 外国旗に敬意を表すときには、外国国旗をステージに向かって左（上位）にあげ、日本国旗は右にあげる。
- ・ 通常の場合には、上位（左）に日本国旗がくる。
- ・ 日本国旗と外国国旗を交差する時は、上位の国旗の旗布が左になるようにし（旗竿の足は右になる）竿と竿との接点は、上位の国旗の旗竿の方がステージに向かって手前になる。



(ウ) 掲揚・降納する場合の“礼”の方法

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

「ご起立をお願いします」

「国旗に対して礼」

(B) 動作の方法

全員は、起立脱帽し立礼する。

(C) 留意点

- ・ セレモニーによっては、この後「国歌」斉唱と続く。
- ・ 着帽して行うか、脱帽して行うかは、担当者の指示に従って行う。



2. 国旗の降納法

(1) 隊活動、その他セレモニーの場合

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「国旗降納」

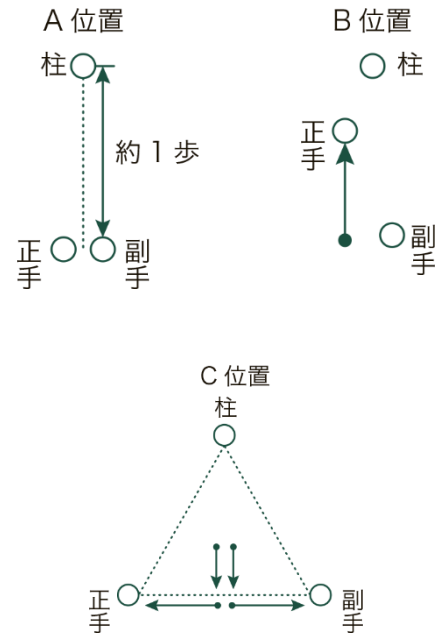
【降納準備】

(B) 動作の方法

掲揚法のほぼ逆順で行う。通常、野外での国旗降納は、降納手2人、指揮者1人（上級班長・副長等）によって行う。

降納手および指揮者は正装で行う。

- ① 「国旗降納」の指示により、降納手2人は柱の前“**A**”位置に進む。
- ② 正手の合図で2人そろって国旗に敬礼する。
- ③ 正手が一步前を出て“**B**”位置につき、柱よりロープをはずし、“**A**”位置に戻って副手にとも綱を渡す。ロープをはずす時に渡す方のロープを確認しておく事（正手はあげづな、副手はともづなを握る）。
- ④ 正・副手は“**C**”位置につき、正手が右手をあげて準備のできたことを知らせる。



【降納】

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「おろせ」

(B) 動作の方法

- ① 「おろせ」の指示で、副手はとも綱をゆっくりと引く。
- ② 降ろす速度は、初めゆっくり、だんだん速くする（号笛の合図により、作業中の者は、その場で作業を中止し敬礼を行う）。
- ③ 完全に国旗が降りてから、“**A**”位置に戻りロープから国旗をはずす。（主に正手ははずし副手は国旗を支える。国旗が地面につかないよう注意する）。
- ④ 正手は2本のロープを輪に結び、1歩前を出て“**B**”位置につき、綱止めにロープを8の字にからませる。
- ⑤ 正手は“**A**”位置に戻り副手とともに国旗をたたむ。
- ⑥ 指示された方法で国旗を返却する。



(参考) 国旗が特に大きい場合やロープが太い場合については、副手も“**B**”位置に進み国旗が「おろせ」の合図以前に下がらないように正手の補助をすることも考えられる。

(注) 上記のものを基本とするが、状況によりロープから国旗をはずさず、柱にロープと国旗とを一緒に結びつけ、正・副手はまわれ右をして、駆け足で隊列の自分の位置に戻る方法をセレモニー進行上行うことがある。



(2) キャンプなどの場合

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

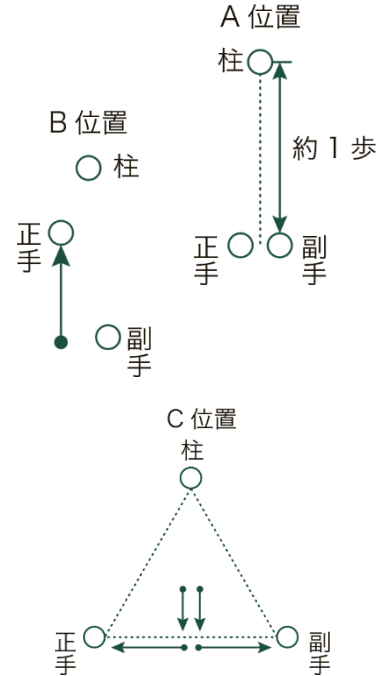
号笛： —
短笛

【降納準備】

(B) 動作の方法

掲揚法のほぼ逆順で行う。通常、野外での国旗降納は、降納手2人、指揮者1人（上級班長・副長等）によって行う。
降納手および指揮者は正装で行う。

- ① 「国旗降納」の指示により、降納手2人は柱の前“**A**”位置に進む。
- ② 正手の合図で2人そろって国旗に敬礼する。
- ③ 正手が一步前を出て“**B**”位置につき、柱よりロープをはずし、“**A**”位置に戻って副手にも綱を渡す。ロープをはずす時に渡す方のロープを確認しておく事（正手はあげづな、副手はともづなを握る）。
- ④ 正・副手は“**C**”位置につき、正手が右手をあげて準備のできたことを知らせる。
- ⑤ 指揮者は正手の動作を確認し、最初の短笛を吹く



【降納】

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「おろせ」
号笛： ———— ———— ————
長笛 (間隔) 短笛

(B) 動作の方法

■国旗手と指揮者の動作

- ① 指揮者は、短笛のあと一息おいて、「降ろせ」の指示とともに長笛を吹く
- ② 副手は、「降ろせ」の指示で、とも綱をゆっくりと引く。
(注) 指揮者は、長笛の後、旗が降りきっていなくても笛を継ぎ足すことはしない。
- ③ 副手が国旗を降ろす速度は、初めゆっくり、だんだん速くする。
- ④ 指揮者は、日の丸の赤い部分の上端が正手の頭頂に達した時に2回目の短笛を吹く。
- ⑤ 国旗手は、完全に国旗が降りてから、“**A**”位置に戻りロープから国旗をはずす。(主に正手ははずし副手は国旗を支える。国旗が地面につかないよう注意する)。
- ⑥ 正手は2本のロープを輪に結び、1歩前を出て“**B**”位置につき、綱止めにロープを8の字にからませる。
- ⑦ 正手は“**A**”位置に戻り副手とともに国旗をたたむ。
- ⑧ 指示された方法で国旗を返却する。

■儀礼者の動作

- ① 1回目の短笛が聞こえたら作業を止めて、国旗に正対し、気を付けをする。
(国旗が見えない位置にいるときは国旗のある方向に正対する。)
- ② 長笛が鳴り始めたら敬礼をする。
- ③ 2回目の短笛が聞こえたら敬礼をやめ、作業に戻る。



(3) 国旗のたたみ方

(A) 動作の方法

旗竿から旗をはずしたら、きれいに折りたたみ格納しておく。横長の両端を2人で持って、次のようにたたむ。

- ① 国旗の裏を内側にして、横に2つ折りにたたむ。(図1)
- ② これをさらに横に2つ折り(計4つ折り)とする。(図2)
- ③ タレヒモつきの方をはなす。(図3)
- ④ つぎに、その表を中側にしておる。(図4)(これで表が全部内側に入る。裏表簡単な見分け方は、ロープの縫い込みか、旗布の周りのミシンの縫い込みを見るとわかる。)
- ⑤ すそのほうからアコーディオンのようにたたんでいく。(図5)(旗布にぬいこんだロープの上端の輪が、中に入るように巻き、タレヒモが外になるように巻く。)(図6)
- ⑥ 最後は、タレヒモを図のようにまいて、止めておく。(図7)



図1

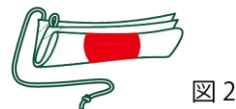


図2



図3



図4



図5



図6

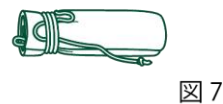


図7



3. 持ち方

(ア) 国旗の持ち方

(A) 動作の方法

- ① 国旗は右肩の前で垂直に保ち、石づきを旗手ベルトの受け袋に入れる。
- ② 右手は、あごの高さで旗竿をしっかりと支え、右ひじは体に密着するようにしめる。(図1)
- ③ 左手は体にそって自然に伸ばす。
- ④ 強風の場合、長時間の場合は左手で石づきの上を押さえ、旗竿が振れないように支える。(図2)

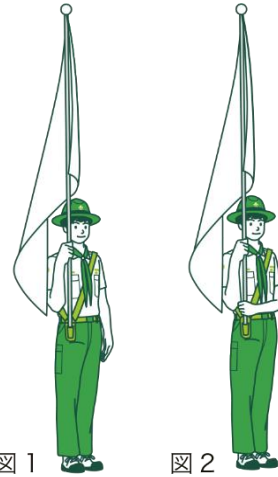


図1

図2

(B) 留意点

国旗の場合いかなる場合でも敬礼は行わない。行進中でも進行方向を向いたままの姿勢を保つ(旗手・ガードも同様である)。

セレモニー等の場合は、右ひじを体に直角にあげる場合もある。(図3)



図3

(イ) 捧持法

(A) 動作の方法

前進準備 — 「前へ」(予令)

- 旗手は予令「前へ」で、次の三挙動で前進の準備をする(気をつけの姿勢から入る)。

第一動

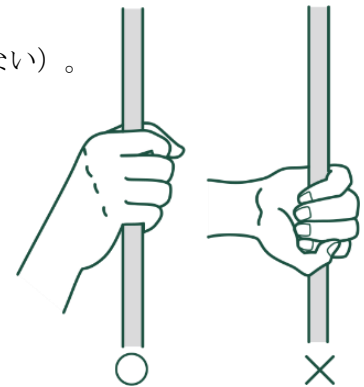
- 旗竿を握っている右手を、そのまま精一杯やや斜め上にあげる(石づきが腰バンドのところにくる)。
- 左手は同時に石づきをおさえ、受け袋に入れる準備をする。

第二動

- 右手は軽く旗竿をすべらせ、顔(あご)の横まで下げ、旗竿を垂直にしっかりと保持する。
- 左手は、石づきを受け袋に正確に入れ、そのままおさえる。
- 右ひじは、しっかりと横につける。

第三動

- 右手はそのまま旗竿を垂直に保持する(逆手持ちをしない)。
- 左手は最短距離で正しく下に伸ばす。



(B) 留意点

- ・ 旗手は、動令「進め」で、左足より力強く前進する。
- ・ 右手は予令第三動のままの姿勢を保つ。左手は肩の高さまで大きく振る。
- ・ 行進中も旗が垂直に保たれるように注意する。



(ウ) 隊旗の持ち方

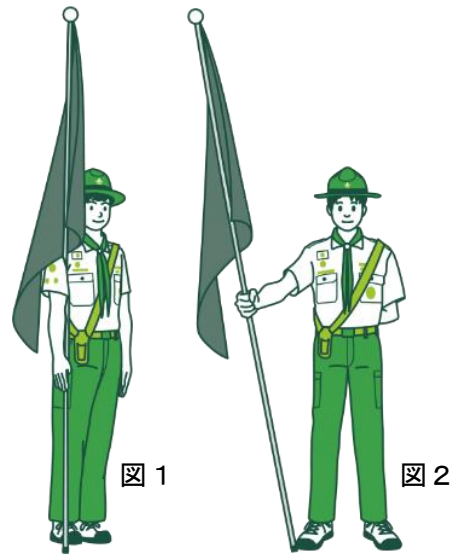
■気をつけ、休め

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「気をつけ」「休め」

(B) 動作の方法

- ① 旗手は、「気をつけ」の姿勢をとり右手は腰よりやや下の箇所まで4本の指をそろえて、旗竿を握る。左手は指をのばしズボンの側にしっかりと密着させる。(図1)
- ② 石づきを、右つま先斜め前に置き、旗竿は垂直に保持する。
- ③ 旗手は、「休め」の姿勢をとり、右手をやや斜め前に伸ばし、旗竿を斜めに保持する。(図2)
- ④ 石づきの位置はそのまま(右つま先前)。
- ⑤ 「休め」の動作は一挙動で行う。



■敬礼

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

号令：「敬礼」

(B) 動作の方法

県連旗・隊旗等の場合、根本（石づき）を旗手ベルトの受け袋の位置に左手でおさえ、右手をのばして前方にかたむける。

(C) 留意点

- ・ 行進中も同様の動作をする。いずれも「敬礼」の号令があった時である。



■行進法

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

「全体、前へ進め」

(注) 太字の部分聞いた後動作に移る。

(B) 動作の方法

国旗の捧持法における行進法 (3-(1)-①) を参照のうえ行う。

(C) 留意点

- ・ 行進の目的、人数、時間によって、また演出上から主催者の指示する内容によって持ち方は異なる。



(4) 班旗・組旗の持ち方

■ 気をつけ、休め

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

「気をつけ」「休め」

(B) 動作の方法

隊旗の捧持法 (3-(2)-①)における「気をつけ」「休め」を参照のうえ行う。

■ 敬礼

(A) 合図（号令・号笛・手の合図）

「敬礼」

(B) 動作の方法

右手に持っていた班（組）旗を左手に持ち替えて、敬礼をする。石づきの位置はそのまま（右つま先前）。
○右図を参照のうえ行う。



(動作をわかりやすくするために班旗の棒を長めに描いています)

■ 持ち歩き方

(ア) 行進する場合

(A) 動作の方法

- ① 班（組）旗を、腰の位置で固定し、地面につかないように注意し、行進する。
- ② 行進中も旗竿が垂直に保たれるように注意する。
- ③ 右図を参照のうえ行う。

(B) 留意点

- ・ 行進の目的、人数、時間によって、また演出上から主催者の指示する内容によって持ち方は異なる。



(イ) ハイキングなどの場合（肩に担ぐ方法）

(A) 動作の方法

- ① 班（組）旗を、肩に担い周囲に注意をはらいながら持ち歩く。
- ② 右図を参照のうえ行う。

(B) 留意点

- ・ 行進の目的、人数、時間によって、また演出上から主催者の指示する内容によって持ち方は異なる。



以上



基本動作・礼式の基準

平成26年4月 初版発行
平成26年5月 第2刷発行
平成26年11月 第3刷発行
令和2年8月 改訂初版発行

発行  公益財団法人
ボーイスカウト日本連盟

〒167-0022
東京都杉並区下井草 4-4-3
電 話： 03-6913-6262 (代表)
e-mail： komi@scout.or.jp

